幼年教育研究年報　第43巻　91－96
The Annual Research on Early Childhood, 2021

養育態度とソーシャルサポート及び育児感情の関連
― 養育態度の種類に着目して ―

森岡まどか[1]・清水　寿代[2]

Relation between Parenting styles and Social support as well as Child-rearing feelings
― Focusing on Parenting Styles type ―

Madoka MORIOKA[1], Hisayo SHIMIZU[2]

Abstract: In recent years, child abuse has become a social problem in Japan, and measures to prevent it have become an urgent issue. In this study, we focused on parenting styles to approach factors related to the parents. Regarding parenting styles, Baumrind (1967) classified parenting styles into responsiveness and control. This study aimed to investigate what kind of social support and child-rearing feelings are related to what kind of parenting styles. To this end, responsiveness and control scale scores were divided into high and low groups on average and classified into four groups. Using one way ANOVA, the results showed that positive feelings toward child-rearing were significantly lower in the low-response/high-control group than in the other groups. Regarding the child-rearing burden, the low-response/high-control group was significantly higher than the high-response/low-control group. Additionally, the emotional and informational support from grandparents was significantly lower in the low-response/high-control group than in the high-response/high-control group. The results suggested that the low-response/high-control group had worse mental health and it is difficult to obtain support from grandparents. It is necessary to clarify the characteristics of mothers with low responsiveness and high control.

Key words: parenting styles, social support, child-rearing feelings

目　的

近年，虐待に関するニュースが後を絶たず大きな社会問題となっている。厚生労働省によると，令和元年度における児童虐待対応件数のうち最も多かったのが心理的虐待で次いで多かったのが身体的虐待である（厚生労働省，2021）。政府は，体罰を禁止し子どもの権利を擁護する児童虐待防止対策の抜本的な強化を図るなど事態の改善に向けて動いている（児童虐待防止対策に関する関係閣僚会議，2019）。

虐待につながる要因は，保護者側･子ども側･養育環境など様々なものがある。保護者側の要因としては，望まぬ妊娠で妊娠そのものを受容できないことや愛着形成が不十分であること，精神的に不安定だったり攻撃的な気質を持っていること，保護者自身に被虐待経験があることなどが挙げられる。子ども側の要因には，何らかの育てにくさがあることや障害を持っていることなどがある。養育環境の要因には，単身家庭や夫婦を始め人間関係に問題を抱える家庭，親族や地域社会から孤立した家庭，経済的に不安定な家庭などが挙げられる（厚生労働省，2007）。令和元年度において，虐待を受けた子どものうち０歳～２歳児の割合は19.5％であった（厚生労働省，2021）。０歳から子どもにアプローチするのは難しく，虐待予防には，保護者側の要因にアプローチすることも重要だと考える。

その中でも，保護者の養育態度は虐待と密接

1　広島大学大学院人間社会科学研究科
2　広島大学大学院教育学研究科

に関連する。Mengtong & Ko（2015）によると，養育態度にアプローチする介入によって児童虐待のリスク要因を減らしたり防御要因を高めたりするという結果が出ている。

Baumrind（1967）を参考にした中道・中澤（2003）によると，養育態度とは，母親の子どもに対する考え方や直接的な接し方を包括したものであり，応答性と統制という二次元で構成され，応答的な養育態度とは，子どもの意図や欲求に気づいて，愛情のある言語や身体的表現を用いてそれに反応する行動であり，統制的な養育態度とは，子どもの意志とは関係なく，母親が子どもにとって良いと思う行動を決定しそれを強制する行動である。その応答性と統制の二次元の得点の高低により，養育態度は３つに分類される。応答性と統制の両方が高い権威的養育態度と，応答性が高く統制が低い許容的養育態度と，応答性が低く統制が高い権威主義的養育態度である（中道・中澤，2003；Baumrind，1967）。統制的な養育態度は低ければ低い方が良いということではなく，中道・中澤（2003）によると，母親が有職の場合，父親が権威主義的養育態度と権威的養育態度のとき，許容的養育態度であるよりも子どもの攻撃行動得点が高かったが，一方で，母親が無職で父親の養育態度が許容的養育態度のとき，父親が権威的養育態度であるよりも子どもの攻撃行動得点が高かった。父親が権威的養育態度であるとき，子どもの攻撃得点は最も低かった。つまり，応答的な養育態度と統制的な養育態度のバランスが重要であり，子どもを受容することと社会的に望ましい言動をしつけることの両方が必要であると言える。

また，上記のように養育態度を分類する理由として，Baumrind（1967）は以下の５つの考え方を用いている。①応答性と統制の両方が高い親は，応答性が低く統制が高い親や応答性が高く統制が低い親より，子どもに対して効果的に強化する，子どもを育てることができる，②応答性と統制の両方が高い親は，自信を持って積極的に意見を述べることができたり，親和的な態度を子どもに示す効果的なモデルになる，③特に，親の応答性が高い場合，親の低い成長要求すなわち低い統制は，子どもの自信の低さに繋がる，④応答性が低い親に比べて応答性が高い親の場合，高い成長要求すなわち高い統制は，子どもの自信の高さや希望の感じやすさ，明るさに繋がる，⑤親が高い統制を伴うがコミュニケーションを明快にとることで，子どもの言動がなぜ良いのかあるいは悪いのか，理由をつけながら子どもが理解できるように説明するため，子どもの自信を持って積極的に意見を述べる力を損なうことなく，親の言葉に納得する，というものである。

このように，親の養育態度が子どもの社会的適応に影響することが明らかにされてきた。そして近年は，子育て支援の観点から，養育態度に影響を及ぼす要因の１つとして，ソーシャルサポートに関する研究も行われている。田並・米澤（2019）は，配偶者，家族，友人の情緒的サポート及び具体的サポートと母親の養育態度の関連を検討した結果，情緒的サポートを多く受け取っている母親は応答性が高いことを明らかにした。一方，統制に影響を及ぼすソーシャルサポートは明らかにされなかった。

田並・米澤（2019）の研究から，養育態度とソーシャルサポートには関連がある可能性が示唆されたものの，彼らの研究では，養育態度を応答性と統制に分けて検討していたため，母親の養育態度を適切に捉えられていない可能性が考えられる。そこで本研究では，養育態度を応答性と統制の二次元で捉え，養育態度と関連する要因を検討する。養育態度と関連する要因は，田並・米澤（2019）でも検討されたソーシャルサポートを取り上げる。また，荒牧・無藤（2008）によると育児不安や育児ストレスなどの否定的感情が高まると親業（parenting）の低下をもたらすことが指摘されていることから，養育態度と関連する要因として育児感情も取り上げることとする。

本研究では，養育態度の応答性と統制を二次元で捉え，ソーシャルサポートと育児感情がどのように関連するかを検討する。本研究により，どのようなソーシャルサポートや育児感情がどのような養育態度と関連するのかを明らかにできる。これらは，親の育児ストレスに対する支援や子どもの特徴に合わせた育て方などが重要視されている現代に有益な示唆を与えられるだろう。

方　法

参加者　保育園と幼稚園に子どもが通っている母親94名が質問紙に回答した。平均年齢は37.18歳（*SD*=4.48）であった。母親の就業形態は，フルタイム24.5％，パートタイム17.0％，専業主婦56.4％，無回答2.1％であった。

調査時期　2019年12月であった。

手続き　幼稚園と保育園から保護者に質問紙を配布し，保護者の回答は，園に設置した回収ボックスにて回収した。幼稚園で75部を配布し66部回収した。保育園で55部を配布し28部回収した。

質問紙内容

①属性

母親の年齢，就業形態，子どもの人数，子どもの年齢と性別，家族構成を尋ねた。さらに，ソーシャルサポートについて，居住距離によってサポートの受けやすさが異なるという要因の統制を行うため，祖父母と別居している場合，祖父母宅との距離を尋ねた。

②養育態度

養育態度は中道･中澤（2003）を参考にした。彼らによると，養育態度は応答性と統制の二次元で構成される。応答性は，「母親と子どものコミュニケーションと養育から成り，子どもの意図・欲求に気付き愛情のある言語や身体的表現を用いて，子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」と定義し，統制は，「養育上の統制と母親の成熟要求から成り，子どもの意志とは関係なく母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し，それを強制する行動」と定義している。「子どもを抱きしめたり，やさしい言葉をかけて愛情を示している」などの応答性を表すものと「子どもが自分のやるべき事をやらない時，“やりなさい”と言う」などの統制を表す22項目から構成された。非常にあてはまる（５点）～全くあてはまらない（１点）の５件法で尋ねた。

③育児感情

育児感情については，育児不安や育児ストレスなど様々なものがあるが，否定的な感情のみではなく充実感や自己の成長感などの肯定的な感情もあり（荒牧，2005；首藤・馬場，1995），両方の側面から捉えるべきだと考えられている。本研究では荒牧・無藤（2008）の育児負担感・育児不安感・育児肯定感を表す16項目を用いる。本研究において，育児負担感とは「育児による負担感・束縛感や子どもの行為・態度へのイライラ」であり，育児不安感とは「子どもの育ち・育て方への不安感」であり，育児肯定感とは「子どもを育てることや子どもの存在自体を肯定的に捉える感情」である。非常にあてはまる（５点）～全くあてはまらない（１点）の５件法で尋ねた。

④ソーシャルサポートとその満足度

ソーシャルサポートは主に，ストレスの解決に直接役立つような資源を提供したり，その資源についての情報を与える道具的サポートと情報的サポート･資源や情報を与えるのではなく，ストレスに苦しむ人の情緒や自尊心，自己評価を高めるよう働きかける情緒的サポートの３種類がある（松井・浦光，1998）。本研究では，荒牧・田村（2003）を参考に，育児における道具的サポートを「直接子どもと関わるサポート」と定義し，情緒的サポートを「直接子ども・母親と対面しなくても，電話や手紙等の手段を用いて授受が可能なサポート」と定義した。また，情報的サポートは安井（2011）を参考に「問題に対処していくために必要な情報や知識を与えること」と定義した。「いざという時に子どもの面倒を見てくれる」などの道具的サポートと，「子育てについての悩みや愚痴を聞いてくれる」などの情緒的サポートと，「いろいろな情報を私にくれた」などの情報的サポート10項目で構成された。しかし，サポートを得ていても自分の子育てのやり方と異なりかえってストレスになる可能性も考えられる。荒牧･田村(2003)は，道具的サポートを得られていても育児不安が高い人もいるという結果に対して，提供者との人間関係や母親が望んでいるサポートとのズレなどにより心理的葛藤が発生している可能性を述べている。そこで，本研究ではサポートを得られているかまたどの程度そのサポートについて満足しているかを尋ねた。サポート源として夫・祖父母・友人についてそれぞれ，非常にあてはまる（５点）～全くあてはまらない（１点）の５件法で尋ねて，満足度を数字で空欄に記入してもらった。

結　果

まず，養育態度の応答性と統制という側面を尺度得点の平均値で高低に分けて４群作った。応答性と統制の両方の得点が高いものを応答統制高群とした。応答性が低く統制の得点が高いものを応答低統制高群とした。応答性が高く統制の得点が低いものを応答高統制低群とした。応答性と統制の両方の得点が低いものを応答統制低群とした。

次に，養育態度の４群によって，ソーシャルサポートと育児感情の種類に特徴が見られるかどうかを検討するために，養育態度４群を独立変数，ソーシャルサポートと育児感情の下位尺

度を従属変数とした一要因分散分析を行った（Table 1）。ソーシャルサポートと育児感情の下位尺度ごとに，その特徴を挙げる。まず，育児感情のうちの「育児肯定感」について，応答低統制高群が他の３つの群より有意に低かった。「育児負担感」については，応答低統制高群が応答高統制低群より有意に高かった。「育児不安感」については，応答統制高群が他の３つの群に比べて低かったが，有意差は見られなかった。次に，ソーシャルサポートのうちの「夫の道具的サポート」について，どの群も値が高く有意差は見られなかった。「祖父母の道具的サポート」と「友人の道具的サポート」についても有意差は見られなかった。「夫の情緒的サポート」について，応答統制低群と応答低統制高群が低く応答高統制低群が高かったが，有意差は見られなかった。「祖父母の情緒的サポート」について，応答低統制高群が応答統制高群より低く有意差が見られた。「友人の情緒的サポート」について，どの群も値が高く有意差は見られなかった。「夫の情報的サポート」について，応答低統制高群が低かったが，有意差は見られなかった。「祖父母の情報的サポート」について，応答低統制高群が応答統制高群より低く有意差が見られた。「友人の情報的サポート」について，どの群も値が高く有意差は見られなかった。

考　察

本研究では，養育態度の応答性と統制という側面を二次元で捉え，ソーシャルサポートと育児感情の種類に群の特徴が見られるかどうかを検討することが目的であった。養育態度４群を独立変数，ソーシャルサポートと育児感情の下位尺度を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ，以下の結果が得られた。

育児感情と養育態度の関連　「育児肯定感」に

Table 1　養育態度の群ごとの平均値と分散分析の結果

	応答統制低 群 (n = 29)	応答高 統制低 群 (n = 16)	応答低 統制高 群 (n = 19)	応答統制高 群 (n = 28)	養育態度	$\eta 2$
育児肯定感	3.97	4.02	3.43	4.14	5.78**	.17
	(.11)	(.15)	(.14)	(.12)		
育児負担感	2.55	2.03	2.85	2.38	4.97**	.15
	(.12)	(.16)	(.15)	(.13)		
育児不安感	2.36	2.41	2.49	1.85	2.61+	.08
	(.16)	(.22)	(.20)	(.17)		
道具的						
夫サポート	4.12	4.33	4.25	3.94	0.58	.02
	(.20)	(.26)	(.24)	(.20)		
祖父母サポート	3.25	3.20	2.97	3.18	0.18	.01
	(.25)	(.33)	(.30)	(.26)		
友人サポート	2.76	2.90	2.82	2.90	0.07	.00
	(.23)	(.31)	(.30)	(.24)		
情緒的						
夫サポート	3.38	3.96	3.33	3.59	1.26	.05
	(.21)	(.27)	(.24)	(.21)		
祖父母サポート	3.20	3.54	2.78	3.85	3.82*	.13
	(.22)	(.28)	(.25)	(.22)		
友人サポート	4.05	3.80	3.73	4.19	1.16	.04
	(.18)	(.24)	(.21)	(.18)		
情報的						
夫サポート	2.75	3.07	2.36	2.79	1.20	.05
	(.22)	(.29)	(.25)	(.22)		
祖父母サポート	3.08	3.25	2.56	3.79	4.32**	.15
	(.23)	(.30)	(.26)	(.23)		
友人サポート	4.13	3.64	3.61	4.33	2.51+	.09
	(.20)	(.27)	(.24)	(.20)		

注）（　）は標準偏差を示す。
$^{+}p < .10$　$^{*}p < .05$　$^{**}p < .01$

おいて，応答低統制高群が他の３つの群より有意に低かった。このことから，応答的でなくかつ統制が高い養育態度の母親は育児を肯定的に捉えられていないことが考えられる。あるいは，育児を肯定的に捉えられておらず，子どもに対しても応答的に接することが少なくなっていることが考えられる。育児不安が子どもへの養育態度に及ぼす影響について検討した松本・赤澤（2018）の研究では，重回帰分析の結果，「育児に対する肯定的感情」は，応答性へ正の有意な影響を及ぼしており，暴力へ負の有意な影響を及ぼしていたことがわかった。このことから，育児に対する肯定的感情と応答的な養育態度には関連があり，育児に対する肯定的な感情があることによって，親の一方的なしつけではなく親子の相互作用を楽しむことに繋がると考える。そして，親子の相互作用が少なく親のしつけを一方的に子どもに伝える応答低統制高群と育児肯定感の低さに関連が見られたと考えられる。「育児負担感」は，応答低統制高群が応答高統制低群より有意に高かった。これによって，子どもと母親の相互的なやり取りは負担に感じづらいが，養育態度の統制の側面が強くなると母親の負担になる可能性が示唆された。先に挙げた松本・赤澤（2018）の研究では，重回帰分析の結果，「育児への負担感・束縛感による不安」は，拒否的態度と暴力へ正の有意な影響を及ぼしていたことがわかった。また，朴（2006）は，子育てに関する親の認知や感情が養育態度や育児ストレスに及ぼす影響について検討した。その研究で得られた尺度相関を見てみると，育児ストレスと「子どもに何か言いつけると，それを守るまでやかましく言って聞かせる」や「子どもに自分の怒りをぶつける」といった衝動的で統制的な養育態度との相関が見られた。このことから，育児への負担を感じていると応答的というよりは統制的な養育態度と関連し，また，統制的な養育態度を取ることは母親の負担になることが考えられる。「育児不安感」においては，応答統制高群が他の３つの群に比べて低かったが，有意差は見られなかった。これは，有意差が見られなかったものの，育児における応答も統制も適度に行われていることで，母親としての育児不安が軽減される可能性が示唆された。松本・赤澤（2018）の研究では，重回帰分析の結果，「育児能力に対する不安」は，拒否的態度へ正の有意な影響を及ぼしていたことがわかった。このことから，応答も統制も行い，積極的に子どもと関わっていることで，育児に対する不安は低くなることが考えられる。

ソーシャルサポートと養育態度の関連　夫・祖父母・友人の道具的サポートと夫の情緒的サポートについては，養育態度の間に有意差が見られなかった。一方で，「祖父母の情緒的サポート」と「祖父母の情報的サポート」については，応答低統制高群が応答統制高群より低く有意差が見られた。このことから，養育態度の応答が低く統制が高い場合，祖父母サポートを得られにくい，あるいはサポートが少ないことにより余裕がなくなって統制的な側面が強くなってしまうこと，また，育児における応答も統制も行われている場合，祖父母との関係も良好でありサポートを得られている，あるいは，祖父母との関係も良好でストレッサーが少なく，サポートも得られていることで育児に対しても余裕が生まれ，子どもにも応答的に接することができるようになることが考えられる。ソーシャルサポートが母親の養育態度に影響を与えるのかどうかについて検討した森下・木村（2004）の研究や田並・米澤（2019）の研究によると，子どもの性別による違いが見られた研究はあるものの，夫や祖父母，友人からの情緒的サポートが応答的な養育態度と関連することが明らかになっている。これらのことから，母親にとっても健康的である応答的な養育態度には，情緒的サポートやサポートが得られる良好な関係性が特に重要である可能性が示唆された。

さらに，特に祖父母の情緒的・情報的サポートにおいて，有意差が見られたことに着目した。これは，一度育児を経験したことがある祖父母という存在により，情緒的サポートでは，育児に対する大変さを理解してくれている，精神的に支えられているという感覚を与え，情報的サポートでは，説得力や信頼があるものとして受け取りやすいのではないかと考えられる。実際に，内閣府が調査を行った「平成25年度家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」（内閣府，2014）によると，理想の家族の住まい方について，母方・父方祖父母と近居と回答した人と同居と回答した人を合わせると，全ての回答のうち５割以上であった。また，祖父母の家事や育児の手助けについて，子どもが就学するまでの間，祖父母が育児や家事の手助けをすることは望ましいか尋ねたところ，５件法のうちの５と４にあたる「とてもそう思う」と「ややそう思う」を合わせた「そう思う」が約８割

に上り，手助けの内容としては「子どもの話しや遊び相手をする」,「子どもに自分の経験や知識を伝える」,「日常生活上のしつけをする」などが上位で期待されていた。これらのことから，養育者にとっての祖父母サポートの必要性が示唆される。一方で，荒牧（2005）によると，妻方の親からサポートを得られていても，育児への否定的･肯定的感情と関連がみられなかった。このことから，祖父母のサポートが得られる利点と欠点を慎重に吟味する必要があるが，本研究の調査では，養育者が祖父母サポートを必要としており，一定の効果を得られた結果と考えられる。

引用文献

荒牧 美佐子（2005）．育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連ーひとり親・ふたり親の比較からー　小児保健研究　第64巻　第６号（pp.737-744）

荒牧 美佐子･無藤 隆（2008）．育児への負担感･不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に　発達心理学研究　第19巻　第２号（pp.87-97）

荒牧 美佐子・田村 毅（2003）．育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャルサポートの規定要因：幼稚園児を持つ母親の場合　東京学芸大学紀要　第６部門　技術・家政・環境教育（pp.83-93）

Diana Baumrind (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs* 75, (pp.43-88)

Diana Baumrind., Robert E. Larzelere., & Elizabeth B. Owens. (2010). Effects of Preschool Parents' Power Assertive Patterns and Practices on Adolescent Development. *Parenting: Science and Practice* **10**, (pp.157-201)

厚生労働省（2007）．子ども虐待対応の手引き　第２章　https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/02.html

厚生労働省（2021）．令和元年度福祉行政報告例の概況　結果の概要 pp.7　https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/19/dl/kekka_gaiyo.pdf

松井 豊・浦光 博（1998）．人を支える心の科学　誠信書房 pp.13

松本 添実・赤澤 淳子（2018）．被養育経験と育児不安が養育態度に及ぼす影響ー幼児をもつ父親と母親を対象としてー　日心第82回大会（pp.841）

Mengtong Chen & Ko Ling Chan (2015). Effects of Parenting Programs on Child Maltreatment Prevention: A Meta – Analysis. *Trauma, Violence, & Abuse* (pp.1-17)

森岡 まどか（2020）．ソーシャルサポートが養育態度に及ぼす影響ー育児感情を媒介要因としてー　広島大学教育学部心理学科学位論文（非公開）

森下 正康・木村 あゆみ（2004）．母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要　第14巻（pp.123-131）

内閣府（2014）．家族と地域における子育てに関する意識調査

中道 圭人・中澤 潤（2003）．父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部研究紀要　第51巻（pp.173-179）

朴 信永（2006）．子育てにおける認知の改善が養育態度・育児ストレスに及ぼす効果　保育学研究　第44巻　第２号（pp.222-234）

佐藤 達哉・菅原 ますみ・戸田 まり・島 悟・北村 俊則（1994）．育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連　心理学研究　第64巻　第６号（pp.409-416）

清水 嘉子・西田 公昭（2000）．育児ストレス構造の研究　日本看護研究学会雑誌　第23巻　第５号（pp.55-67）

首藤 敏元・馬場 康宏（1995）．母親の育児感情と幼児の社会的コンピテンスに関する研究　埼玉大学紀要　教育学部（教育科学）第44巻　第１号（pp.53-67）

田並 幸恵・米澤 好史（2019）．未就園児を育てる母親の養育態度とソーシャルサポート・自己評価の関係ー愛着形成の視点からー　和歌山大学教育学部紀要　教育科学第69集（pp.27-34）

安井 芙美（2011）．自己志向的完全主義とソーシャルサポートおよび育児ストレスの関連　兵庫教育大学大学院学校教育研究科学位論文（非公開）

児童虐待防止対策に関する関係閣僚会議（2019）．児童虐待防止対策の抜本的強化について https://www.mhlw.go.jp/content/000496811.pdf